

昭和48年1月13日第三種郵便認可

HSK通巻503号

発行日/2014年2月10日(毎月10日発行)

編集人/白老町手をつなぐ育成会 佐藤春光

北海道白老郡白老町字萩野310-110

TEL(0144)83-3537

会報/209

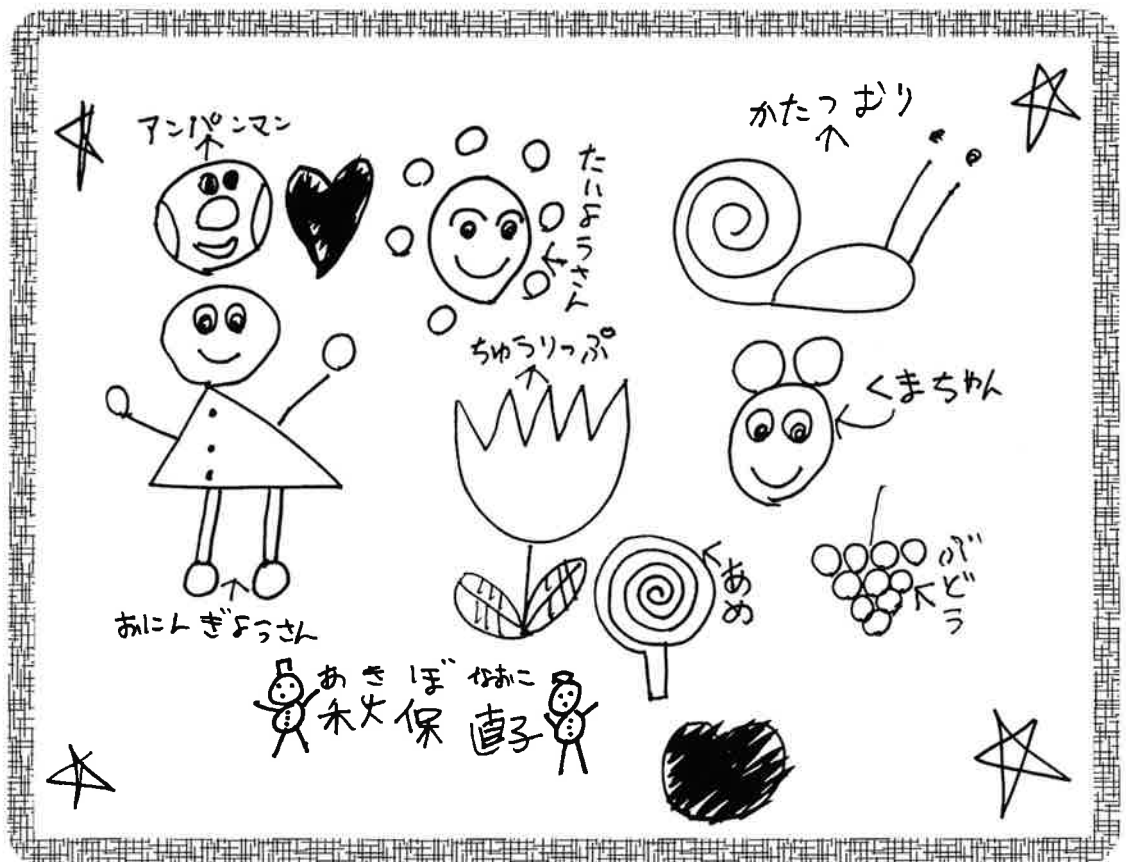
発行人/北海道障害者団体定期刊行物協会(HSK)

定価/1部100円(会費を含む)

HSK

2014. 2月号

# ほほえみ



白老町手をつなぐ育成会

# ホテルみたいだ！



← 看板

正面 →



← 広い廊下

↓ 天窓



↓ 外からバリアフリー



右田さんからご寄贈された旧医院の建物を、1月29日より名称をホーム『そよ風』としてグループホームの運営を始めることにしました。

1月や2月は始めたばかりですので一人か二人の入居と思っていたのですが、あっという間に5人の入居が決まり残りはあと一部屋となってしまいました。この一部屋にも何人かの希望が来ていますので、2月中には定員がうまってしまうでしょう。それにしても、グループホームの希望者が多いのにはびっくりしました。これからは、満室になっている女子棟の建設を考えたいと思います。



さて、このホームに入居した牧田さんは、その快適さに「毎日ホテルにいるような気分です。」と感想を言ってくださいました。

## 一つの願いをみんなの願いに→夢は叶う

社会福祉法人ホープの設立は、障がいを持つ親や本人の願いを出来るだけ支援（実現）したいという熱意と善意からでした。

今までの施設は、定数や障がいの程度や障がいの違いで断ることができました。ですから、私たちの出発点は、障がい者の課題を親や肉親だけに任せるのではなく、一緒に解決をさぐるスタンスをとったのです。障がい者が地域で普通に暮らせるようになるためには何が必要か、その事が私たちの行動の基本でした。



フロンティアが始まったのは、不景気になり首を切られて戻ってきた子ども達のための働く場を作ることがきっかけでした。私たちにとっては未知への歩みでしたので、フロンティアという名前をつけ、ボランティアを募集し、町内にあった四つ葉作業所の一角を間借りしての出発でした。人が増えボランティアに依存する限界を感じ、社会福祉法人にすることを決意したのです。法人になってからはスピードがアップし利用者の仕事もどんどん変化しました。今までは内職のような仕事だったのが、たくさんの支援者や企業の支援を受ける中で事業化していったのです。

グループホームが欲しいという声が出てきて、赤字でも良いからまず始めようと思いました。最初はたったの二人の入居でしたが、それから2年、12名の居室は満杯になりました。そして今年、新たに6名のグループホームを開設する事になったのです。

登別市の手をつなぐ育成会や他の障がい者団体と協力し合って、登別に新しい事業所を開設する準備も順調に進み、2014年度には何とかかなりそうなところまでできました。

私たちのやっていることは株式会社の事業とは違います。社会福祉法人ホープが大きく



なっているのは、普通に暮らしたいという障がい者のニーズがまだまだたくさん有ることなのです。そして、まだまだたくさんの障がい者が地域や家庭にいるということなのです。障がい者の願いを実現するためには、その願いを支援する輪が広がらなくてはなりません。その輪が広がるかどうか、会員と後援会員の皆さん、地域の皆さんの力合わせ抜きにはあり得ません。みんなの力の到達点がこの社会福祉法人ホープフロンティアの実力なのです。これからもご支援よろしくをお願いします。

# 父母学習会のご案内

- 【 とき 】 平成26年2月24日(月)  
受付 16時15分～  
講演会 16時30分～18時30分
- 【 ところ 】 白老小学校 2階 図書室
- 【 演題 】 「子どもの育ちと親の関わりについて」(仮題)
- 【 講師 】 北海道教育庁胆振教育局支援課義務教育指導班指導主事  
吉岡大介(よしおかだいすけ)先生
- 【 内容 】 ※吉岡先生は現在胆振において特別支援教育のスーパーバイザーとしてご活躍されています。ことばの教室を担当されていた経歴もあり、子育てのみならず学校生活のことなどについてもご助言頂きたいと思えます。  
※発達障害の子どもの生活習慣の形成や親の関わり方などについてお話しをしていただく予定です。また特別支援教育全般についての質問などにもお答えいただけると思えます。事前に聞いてみたいことなどありましたらことばの教室までお知らせ下さい。
- 【 申込み 】 2月20日(木) 託児申込みの方はこの日までにお願ひします  
(お子さんの年齢と名前をお知らせ下さい。)
- 白老小学校ことばの教室(電話82-3532)まで
- 【 参加費 】 託児代200円(育成会会員は育成会で補助します)

## ソーシャルファームジャパン 北海道プロジェクト

2月8日に道民活動センター「かでの2・7」で恩賜財団済生会理事長 炭谷 茂氏、東京家政大学教授 上野容子氏、武蔵野美術大学教授 宮島慎吾氏、農事組合法人共働学舎新得農場代表 宮嶋 望氏招いて基調講演とディスカッションを行いました。ソーシャルファームジャパンの炭谷理事長は、ソーシャルファームの定義を、①社会的弱者に光をあてる②ビジネス的手法で③就労の場を提供し④人間としての尊厳性の向上を目指すとしていますが、その道は狭隘な道を通るしかないとして、4点の課題を示しました。①一般企業と競争しなければならない②公的援助を前提としない③障がい者等労働能力に差がある者の共労④資本金、技術の蓄積、販売力等です。しかし、成功するためのポイントもあるとして①商品・サービスの開発②販売力の強化③経営資金の確保④支援者の確保⑤健常者とのコラボレーション⑥国際協力等をあげました。

このお話を聞いていて、社会的弱者(障がい者も含む)の社会的自立を願った活動は、それぞれの出発点や経過は違っていても同じような結論に至るという事を実感しました。社会福祉法人ホープフロンティアも⑥の国際協力を除けばほぼ同じ努力を積み重ねて来ていました。

# 刑罰よりも福祉

## 知的障害者、高齢者の累犯防げ

無銭飲食などの軽微な罪を繰り返して、刑務所と社会を行き来する累犯の障害者や高齢者。この負の連鎖を断ち切ろうと、全国に先駆けて動きだしたのは長崎県雲仙市の社会福祉法人南高愛隣会だ。彼らを、刑務所ではなく、福祉に橋渡しすることで社会復帰させる試みで、刑事司法を巻き込みながら全国に広がりがつつある。同法人の酒井龍彦専務理事に現状や課題を聞いた。

### 長崎の「南高愛隣会」 酒井龍彦専務理事に聞く

累犯の障害者や高齢者の支援に取り組む南高愛隣会。すべての始まりは2003年、田島良昭・前理事長が聴いた一つの講演だった。

講演したのは山本讓司元衆院議員。秘書給与詐取事件で実刑判決を受け、服役した刑務所で知的障害者を世話した体験をつづった著書「獄窓記」を03年に出版している。その山本さんが「刑務所には知的障害者がゴロゴロいる」「刑務所が福祉施設化している」と話した。田島前理事長は大きな衝撃を受けたという。



「累犯障害者と高齢者の社会復帰には、受け皿となる福祉施設の確保が急務だ」と話す酒井専務理事

「この話は後に、06年の矯正統計年報で裏付けられました。新規受刑者のうち、4人に1人が知的障害が疑われるというのです。当時、田島から『われわれ福祉関係者はこのことに気付かなかった。知らなかった。福祉の手からこぼれ落ちる人

田島前理事長や酒井さんらは動いた。厚労省に働きかけて06年に累犯障害者対策の研究班を発足。田島前理事長が自ら代表に就き、メンバーには福祉関係者や犯罪学者、弁護士、法務省職員

がこんなにいるとは。支援を受けられなかった人には本当に申し訳ない」と聞かされました。これが取り組みの原点です」

(佐藤一)

## 全国に先駆け支援／受け皿拡大が課題

らが名を連ねた。この研究の中で同年から3年間、南高愛隣会で、刑務所を出た障害者らを受け入れ、社会復帰させる取り組みを試行した。障害者らを福祉施設に橋渡しする「出口支援」だった。

厚労省は研究班の提言などを受け、09年度から、橋渡し役の組織「地域生活定着支援センター」の設置を推進、すでに全都道府県に開設された。研究班はさらに、障害者らを刑務所に送るのではなく、福祉の支援で更生させる、いわゆる「入り口支援」の実施も求めた。

一方、南高愛隣会は現在、初犯の受刑者について、福祉による更生支援につなげるため、仮出所時期を早めるよう、法務省側に要請している。

「こうした取り組みに共通しているのは、可能なら、累犯の障害者や高齢者を何とか福祉につなげようということ。なぜなら、刑務所では、一人一人に即した矯正プログラムをつくるのが難しく、更生が期待できないケ一

「福社につなぐ」ために

は、福祉施設側の協力が欠かせない。だが、たとえ軽微であっても、罪を犯した人を受け入れることに施設側は及び腰になる。南高愛隣会はそのうちを見越して、自立訓練施設「トレーニングセンターあいりん」と中間施設の「更生保護施設雲仙・虹」を開設している。

「基本的にあいりんは入り口支援、虹は出口支援の人が対象です。どちらも社会復帰に必要で、金銭管理の仕方や日常のあいさつなどを身につける訓練を行っています。ただ、あいりんの場合、起訴猶予処分や執行猶予判決を受け、実際に有罪となって刑に服することがなかった人たち。ですから、罪を償うことや二度と事件を起こさせないための更生プログラムが主体となります。こうして次の施設が抵抗感なく受け入れられるようにするのが自立訓練

施設や中間施設の役割です」

道内にも札幌と釧路に地域生活定着支援センターが開設され、出口支援は始まっている。札幌地検も累犯の高齢者を起訴猶予処分とすることで、刑務所ではなく、福祉に橋渡しして社会復帰を促している。全国で広がっている。全国でも福祉の「刑罰よりも福祉」の流れ。今後、受け皿となる施設が増えるかどうかは課題だ。

「少しずつとはいえず、これから受け皿は広がっていくでしょう。でも、福祉は万能ではない。いくら支援しても、無断外出したり、中には再犯に及んだりする人も出てくる。それでも、われわれの方から諦めるのではなく、出所してきたら、また関わる。この繰り返しのなかで、出口支援や入り口支援が強力なセーフティネットになれば良い。ただ、それには司法サイドにこうした現状を理解してほしい。もちろん、社会全体にも、です」

ふろんていあ♡メール  
**Frontier**

就労支援施設  
フロンティア♡MAIL

2014年2月号

〒059-0922  
白老町萩野310-110  
TEL・FAX0144-83-3537

フロンティアの新しい職員  
運転手の山下久雄さんです



フロンティアの送迎など運転手さんとして働いていただくことになった山下久雄さんです。

2月3日(月)朝の会で山下さんの生の歌声とギターを披露していただきました。とても綺麗な歌声に感動しました。

これからも沢山みんなの前で歌っていただきたいなあ~と思います。

### 山下さんから

今年は午(馬)年、私は年男です。生まれは、小樽です。私は母の介護を7年間しました。そのうちの5年間は、人工透析、1年6ヶ月は、胃ろうもしました。その母は平成23年10月14日に、亡くなりました。その母が亡くなる数ヶ月前、自宅で私がピアノを弾いて歌っていたら、「音楽・歌つづけなさいよ」と母が言いました。

私の父は平成6年4月13日に亡くなった時、私は心に大きな穴があいて音楽が、出来なくなりました。そのことを知っていた母が、私に気づかせてくれたと思いました。

それで、私は母が亡くなってから音楽活動を再開しました。そして、去年夏ピースフェスタコンサートで歌った時、スタッフの中にフロンティアの松尾さん・山田さんがおりました。そして、そのコンサートを施設長の佐藤さんが聴いて下さりそれが御縁で去年、茶連窓でクリスマスコンサートをする事になりました。

それがまたまた御縁でフロンティアで送迎の仕事をする事に、なりました。

フロンティア関係者の皆様よろしくお願ひ致します。

### 山下久雄さんのプロフィール

- ◆昭和49年6月NHK軽音楽オーディション
- ◆元ローレライ ゾリスTEN
- ◆平尾昌晃歌謡選手権審査員特別賞受賞



# 新成人おめでとう



1月18日（土曜日）、四団体主催の新年会でフロンティアの新成人4名がステージに上がり祝福の拍手を受けました。

昨年まではフロンティアの中でしていたお祝い行事でしたが、今年はいくさんの来賓や出席者の見守る中、立派に晴れ姿を披露しました。

お母さんへ感謝の花束贈呈もあり、思い出に残るセレモニーとなりました。



## 一部事業縮小になります！

2006年5月31日、120羽の鶏からはじまった養鶏でした。町内外のたくさんの後援会員さんに購入して頂きましたが、この2月末をもちまして町外配達と、個人宅への配達は終わらせて頂く事になりました。

長い間、定期的に応援して頂き厚く御礼申し上げます。

今後ともお近くの店舗でご利用下さいますよう宜しくお願い致します。

尚、発送は変わらずに行います。100個以上につきましては送料無料でお注文をお受けいたします。100個以下の場合は送料を別途いただきますのでご了承下さい。

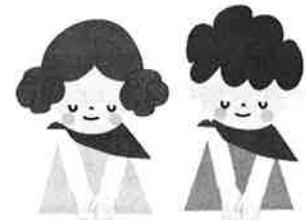
今まで学校関係を訪問・販売させていただいておりましたが、事業縮小により勝手ながら中止させていただきましたこととなりました。大変お世話になりました。

これまで利用者に対して励ましの言葉をかけて頂いた皆様本当にありがとうございました。

これからは、パンを中心に町内販売をメインに販売してまいります。

いままでご愛顧いただき誠にありがとうございました。

ありがとう





## HSK ほほえみ

昭和48年1月13日 第三種郵便物認可

発行日 2014年2月10日発行(毎月10日発行)

HSK通巻番号503号

編集人/北海道白老郡白老町字萩野310-110

白老町手をつなぐ育成会 佐藤 春光

Tel. 0144-83-3537

会報/209号

発行人/北海道障害者団体定期刊行物協会(HSK)

定価/1部100円(会費に含む)